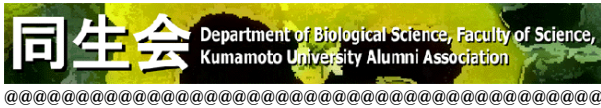


同生会だより

最終号
令和4年4月発行
発行:同生会役員会



同生会解散に至った経緯

2004年(平成16年)4月に、理学部は数理科学科、物理科学科、物質化学科、地球科学科、生物科学科、環境理科学科の6学科制を廃して、理学部理学科一学科制に改組しました。

「同生会」は生物学科の同窓会ですが、主に上記の理由から、年々入会者が減少し、役員引継ぎの面でも運営が難しくなってきました。会長をはじめ役員の後任探しが難航して任期を超えて留任、現役員の会計は一人欠員の状態が続きました。熊大理学部同窓生の教員が次々と退官されたことも影響し、大学と同生会の関係も以前ほど固いものではなくなりました。加えて、コロナ禍です。会員の高齢化も考慮すると、近年は総会や懇親会など集まる機会を設けることができませんでした。

そのため、役員会にて「解散も含めた会の在り方について議論する時期にきている」と意見があがりました。

そこで、令和4年4月に委員の皆様と同生会の存続についてのアンケートを実施いたしました。アンケート回収状況は、同生会委員50名中、有効回答数28名、回答なし22名でした。結果、同生会の存続については、28名のうち24名が「解散してもよい」と回答。「存続すべき」が2名、選択肢にはありませんでしたが「決められない」と回答した人が2名。「存続すべき」と「決められない」と回答した4名のうち、「役員を引き受けてもよい」と回答したのは2名でした。有効回答数の86%が「解散してもよい」との意見である上、委員の半数近くが回答なしという状況も、会への関心の低さを示唆しているものと推察されました。

これらを考慮し、令和4年度第1回役員会(5月)にて「同生会は令和5年3月31日をもって解散」と方針を決め、8月に同生会HPと理学部同窓会HPに解散予告を掲示するとともに、連絡先の分かる会員623名分の解散予告ハガキを送付しました。

同生会費の残金については、引き続き後輩達のお役に立てるよう、大学の基金に寄付し、理学部生物コース卒論・修論のベストプレゼンテーション賞協賛金に利用してもらう手続きをいたしました。

誠に寂しいですが、これまで培われた生物科の絆は永遠のものとし、今後ますますの皆様のご健康とご活躍をお祈りします。また、このような方向になりましたことを、役員一同深くお詫び申し上げます。

@@

会長挨拶

幕を引くにあって

～同生会の幕引きに係るとは夢にも思わなかった～

同生会会長 高添 清



同生会の解散に際して今回の私のご挨拶は、これまでの一会員としての私と「同生会」とのかかわりについて具体例を挙げながら述べたいと思う。

本会の50周年記念誌(1999年)編集後記に編集委員長として「100周年記念号を楽しみにして筆を置きます」としたためた。

あれから23年、私事で恐縮ですが当時幼児だった長男は、私と同じ熊大理学部生物コース(生物学科)に学び、修士課程終了後他大学の大学院博士

後期課程に進学している。将来、熊本に戻り地域社会に貢献することを目指して学業に励んでいると思う。幼少時代から一回生西岡鐵夫氏・今江正知氏両先輩の指導するいくつかの研究会に参加して育ち、熊大では副島顕子教授をはじめ多くの先生方から教養を受けた生粋の同生会会員である。

また、私の父は師範学校時代に野口彰先生を恩師とし、私自身は生物学科19回生である。終戦後3年の1948年生まれ、いわゆる団塊世代であり一学年16クラス761名、全校生徒が2千名を軽く超えた大分上野丘高校を経て熊本大学にやってきた。当時、熊本大学生物

学科は1年次募集人数15名の時代であった。(一年間講義なしという学園紛争も経験した。)

しかし、現在は理学部(募集人数200)として入学する。2年次になってコースを選択し3年次に各コースにやってくる。生物コースには60名近くの集団がやってくる凄まじい状況に驚く、同時に先生方のご苦労にも頭が下がる。ところが、その60名近くの中で終身会費3000円を支払って同生会会員になるものは5人も満たない状況が長く毎年繰り返されてきた。一時期、学生の郷里に「同生会費納付」依頼の手紙を出して20人ほどから会費をいただいたが、熊本地震や度重なるコロナ感染禍で事務局が上手く機能せず名簿作成の作業の遅れもあり、その後この手段実施は不可能となった。

新入生時から生物学科同生会会員として、諸先生方、先輩諸氏から様々なアドバイスやお世話になる経験を積み、多様な学びの機会をいただいた私たちと現在の学生とは時代の変遷もあり「違い」が生じている。

昔、各研究室の実験室のドアは何時も開いており、どの研究室にも自由に出入りし、どのような研究が行われているか情報は昼夜を問わず、何時でも手に入れることができた。貴重な時間と空間があった。「50周年記念誌」にはそのことが見事に掲載されている。

そこには旧制第五高等学校で教鞭をとった夏目金之助の「其れ教育は国家の基礎にして師弟の和熟は教育の大本也」の精神が引き継がれていたと思う。

熊大のホームページを見ていくと、生物の記述部分でその内容が高く評価されている「50周年記念誌の表紙」と、ある年の夏休みに臨海実験所で行われた「研修後の懇親会で撮られた1枚の写真」が掲載されている。その写真は佐藤栄治先生が撮影されたものだが同生会の精神が見事に読み取れる。熊本県内で高校教師をしている同生会会員に集合をかけた一泊二日で開かれたこの研修会(卒業生51名先生方13名)は今でも思い出すと自然と笑みが出る。(ただし、多くの方々から賛辞をいただいた記念誌は2000年以降の卒業生には配布されていない。ホームページでしか見ることができなかったが、そのホームページからさえいつの間にか「記念誌」が消えていた。コロナウイルスがさらっていったのであろうか。)

6年後、大学院修士課程を経て望城教育現場に身を置くことになり、植物採集実習で訪れた市房山を望む県立球磨農業高校に赴任することになった。いきなり生徒会の担当、山岳部と生物部の顧問を命ぜられ、動物分類形態学の吉倉真教授の「35歳までに打ち込んだものがライフワークになるよ」とのお教養の通りになる。

受験戦争と言われた時代、教科以外の教育活動(特別教育活動)の柱である生徒会活動に対する理解・取り組みはきわめて浅く、基礎知識の詰め込み教育の弊害がマスコミを賑わしていた。「ハムのスライス切り」と形容される偏差値ランキングが流行し、社会問題となっていた。

私は「教科教育」と「教科以外の教育」の二本柱の融合を当時から目指した。

文化祭や体育大会・卒業生を送る会・ロングホームルーム(多くの進学校では自習の時間になっていた)のテーマ内容精選・生徒会役員選挙・危機管理教育・安全教育・環境教育・人権教育・平和教育・女性教育・男性教育・食育・男女平等教育・市民教育・公害教育など……あらゆる社会的な現代の課題に配慮しつつ1000人近い生徒を背景に、生徒の気持ちを職員会議で訴えることも多かった。

生徒会担当だから勤務時間などは出鱈目だった。生徒会執行部との会議や行事の準備で17時に勤務終了帰宅など夢のまた夢であった。しかし、周囲の理科の先生方や、生徒会担当のスタッフにも恵まれ多様な経験と教員としての楽しさも学んだ。その後初任から6年目にして転勤を命じられ芦北、熊本西、第二、菊池農業、翔陽で退職となった。

どの学校でも生徒指導部、生徒部に主に配属され総務部・教務部・図書部・環境部・学年主任の任に当たった。そしてどの学校でも「研究紀要」の創設・出版や年誌(勤務校の一年間の教育活動記録誌)の編集出版に係った。この経験は「生物学科50周年記念誌」や「熊本県内の特別天然記念物二ホンカモシカの生息分布調査団編成」「熊本野生生物研究会設立」「熊本野生生物研究会アフリカ隊派遣」「熊本県高等学校生物実験書編集出版」「生徒理科研究発表会生物分野の審査基準の改正」「熊本県環境審議会」「熊本県環境影響評

価審議会」熊本県自然保護関係団体協議会主催の自然保護講演会」など様々な活動にも取り組みの基礎・基本には熊大で学んだものがある。

どの取り組みにも諸先生方と学生会諸氏に本当にお世話になり心より感謝している。

熊本県下で最も盛んだった芦北高等学校(当時 800 名の在校生がいた)の三日間開かれた文化祭があり、三つのテーマ別討論会の一つ、環境問題を考える分科会には今江先生に助言者に来ていただいた。また、第二高校時代、熊本県高等学校教育研究会生物部会理事長時には冬期研修会に小野先生、井上先生、内野先生を講演者・実験実習の指導者で来ていただいた。「生物実験書編集」ではほとんどの同生会の先生方に原稿を分担していただき、生物教室の先生方に監修をお願いした。さらに熊本県自然保護関係団体協議会会長時の「自然保護講演会」には、講演者として弘田先生・副島先生・逸見先生・高宮先生をはじめ多くの方にお世話になった。「学生会」の幕を閉じることに後ろ髪を引かれるということは今ほど感謝とともに、寂しく感じることはないと思う。

さて、齢を重ね、2022 年 11 月、急性心不全の疑いで深夜に熊本赤十字病院に搬送され、救急処置と検査を受け 3 週間ほど入院し、退院後に妻の実家で厳重な健康管理下に置かれた。

毎朝、リハビリを兼ね菊陽から連れられてきた愛犬とともに近くの上江津湖周辺を散歩した。途中でカワセミや夏目漱石の句碑に出会った。そのたびに漱石が残した言葉がこれからも母校の基本理念として活かされていくことを願った。研究のみならず、多くの名伯楽を産み、多様な学びの機会をいただいた生物教室の今後の発展を祈らずにはいられない。今後は理学部同窓会の中で、少しでも多様な貢献できればと思う。

繰り返しますが、学生会の遺伝子がどこかで受け継がれ、現代社会の命題である「環境・平和・人権・共生」の基本の発展のために、同生会会員の皆様のこれからのご健康とご活躍を祈る。水俣病問題・川辺川ダム・球磨川治水・地震対策・健康対策と課題は多い。そして平和が続くことを祈るばかりの昨今、忘れないようにしたいと思う。「これから起きる事件・事象に今の我々には責任がある」という加藤周一氏の言葉を。

最後になりましたが、多くの自然災害の中、庶務担当の伊東麗子さんをはじめ同生会役員の方々には長期にわたってご苦勞をおかけし、大変お世話になった。心から厚くお礼申し上げる。

@@

副会長挨拶

同生会の解散に当たり

同生会副会長 井上 久

私が在籍していた当時は、生物科は定員が 15 名と少数であったこともあり、同学年だけでなく大学院の先輩方から大学 1 年生まで一緒に飲みに行ったり下宿にお邪魔したりと幅広い付き合い合っていました。1 年生の最初の野外実習の兜岩の植物採集では、リュックを持っていなかった私は 3 年生のゼミ室にいて事情を説明すると、すぐに俺の貸すからといってくださる先輩がいらっしゃり、無事に実習に参加することができました。いきなり現れた 1 年生に温かく接していただき、この学科の懐の深さを実感しました。

同生会の会報やHPを読んだり、集まりに参加し懐かしい顔に会ったりすると、一足飛びに学生だった時代にいくことができました。お世話になった先生方、先輩方や後輩の人たちと何の気遣いもなくその当時のままの会話を楽しむことができることが、何にもましてありがたいことだと思っていました。同生会は、私にとって学生時代に連れて行ってくれるタイムマシンのようなものでした。

そのような中で同生会の役員をさせていただくことになりましたがコロナの影響で何もできないまま同生会が解散することになり、何か寂しい限りです。役員のみならず中々見つからず例外的に任期を延ばしながらやり繰りをしてきましたが、それも限界に達してしまいました。しかし、様々な事情を乗り越えてここまで維持できたことは、生物科の同窓生の力だと思っています。「同生会」という組織はなくなりますが、その中に流れていた精神は今後も受け継がれ、何かの折に先輩方とお会いできたときには、またタイムマシンに乗せていただけるものと確信しています。この 4 年間何もできませんでしたが、ありがとうございました。

@@

監事挨拶

「同窓意識は消えない」

矢加部 和幸(19 回生)

「どこの高校出身ですか」とは熊本県人の口癖か。新聞記者という仕事柄、多くの人に会ったが、この言葉を何度も聞いた。そして次に聞かれるのが「何回生ですか」。福岡県出身者にとってどうでもいい二つの質問の持つ意味が、奥深いことであることを知ったのはひょんな話を聞いたことからであった。

過日、東京・霞が関のとある官庁の事務室。熊本県が国に要望している事業の説明をしていた県庁職員は、お願いする立場とあって下手に下手に出ていた。机を挟んで座っていたのは職員よりずっと若いキャリア。相手が地方自治体の職員だからか、少々横柄さを感じさせる態度だったようだ。仕事の話が一段落して、四方山話になった時、県庁職員がいつもの癖で「どこの高校出身ですか」と聞いたところ、「済々黷です。熊本の」という答え。この瞬間、立場が逆転した。「俺は済々黷の〇回生。10 年も後輩ではないか」。仕事に私的な先輩・後輩の関係を持ち出すのはルール違反だろうが、話はとんとん拍子に進んだという。

ほかでも熊本の高校同窓生の絆の強さに驚かされるのがしばしばだった。選挙はもちろん、イベント事でも同窓会のバックアップがあれば鬼に金棒だし、就職の時もものをいう。「なぜ高校なのか」と尋ねても熊本県人でも分からないそうだから、他県人では分かるはずがない。もともと高校野球などを見ていると、出身高校にこだわるのは一人熊本県だけではないような気がしないでもない。

さて、同生会である。発足が新制熊本大学がスタートした昭和 25 (1950)年だから、今年で 73 年になる。旧制三高の「剛毅朴訥」の精神を受け継ぎ、「師弟の和塾」の基本としてきた生物学教室の伝統の中で、恩師はもちろん同級生、先輩や後輩が集ってきた熊本大学の中でも最古の部類に属する同窓会である。

熊本大学入学時に訳の分からないまま、考える余裕も与えられず、義務のように会費を払われ、終身会員となった。そして卒業後も毎年送られてくる会報に、思い出を重ねながら、同生会の会員であること改めて確認し、熊本の高校同窓会ではないが、卒業から半世紀も経った今も生物学科卒を意識し続けてきた。しかし、3 年生が作ることが不文律だった会報は、理学部の改編で生物学科がなくなったことで、その役目を終えた。

今、学科ジャンパー(クアジャム)が韓国の大学生の間で流行っているという。学科への愛着の強い学生たちが私的に製作する制服のようなもので、野球ジャンパーの背中に大学名や学科などを大きく、袖に学年や名前を入れて、同じ学科に所属している仲間であることをアピールする。同窓意識の強い韓国ならではのアイテムだろうが、「学生発の制服作りは楽しいし、かわいらしい」と、韓国留学の経験のある学生を中心に日本の大学でも流行の兆しがあるという。

同生会の解散は時代の流れであろうが、熊本大学で生物学を学んだという同窓意識は消滅することはない。学科ジャンパーではないが、同生会には「学科への愛着」「楽しい思い出」、そして何より恩師や先輩・後輩の強い絆があった。その思いは終生変わらないはずだ。

@@

先生方の同生会解散についての思い①

繋がりを祈って！

高宗 和史

同生会の皆さん、お元気ですか。

私は、修士課程第 16 回(昭和 58 年)修了で、昨年お亡くなりになりました伊東鎮雄先生に薫陶を賜りました高宗和史です。当時は、熊本大学大学院理学研究科には博士後期課程がありませんでしたので、伊東先生のご紹介で北海道大学大学院博士後期課程に進学しました。その後、佐賀医科大学文部技官、北海道大学理学部助手を経て、平成 3 年より安部眞一先生のお誘いで熊本大学生物学教室に着任しました。それから 31 年間の長きに渡り熊本大学の生物学教室でお世話になり、この 3 月に晴れて退職となりました。私が生物学教室に着任した当時は、理学部生物学科と教養部生物学教室に今江先生をはじめ 8 名の生物学教室同窓生の先生がおられ、先生方を中心に同生会の運営がなされていました。私も時々役員を仰せつかり、同生会運営を行ってきました。しかし、先生方が御退職される度に同生会の運営に携われる教室の先生が少なくなり、学外の方々に役員をお願いせざるを得なくなり、今日に至っています。本当に多くの方々のお世話になり、感謝の念に堪えません。

生物学教室の学生はというと、当時 1 学年 40 名という大所帯でした。入学時に終身会費を納めてもらうために、毎年 40 名が同生会に入会するようにしました。そのため、一気に会員数が増え、総会で決める際に委任状を集めるのに苦勞した覚えがあります。そこで、議決する場を各卒業年度の代表が集まる委員会に変更しました。平成 16 年に理学部が理学科 1 学科に改組され、生物学教室(生物コース)に学生が入ってくるのは 3 年生からになりました。生物コースは人気があり、毎年 50 名以上進学してきます。これだけの人数がほぼ毎年入会

するのかなと思っていましたら、入会手続きを行なった学生だけが同生会員になるという形にしたためか、毎年数人だけしか入会しないようになりました。昔は1学年の人数が少なく、学年を超えた繋がりがあり、皆で苦楽を共にし、同じ釜の飯を食べたと感じておられる方が多いようです。しかし、1学年50名以上、しかも2年次までは別のクラスで過ごしてきた間柄では、一体感を持つのは難しいのかもしれませんが。そのような最中、同生会を解散するという話が出てきました。新規入会者の減少と同生会役員の成り手がいないことが原因のようです。生物学教室同窓生の先生の多くが退職し、教室と同生会の繋がりが以前ほど強いものではなくなったと感じられていることも要因の一つのようです。これは、私にも責任があり、反省しています。議決権がある委員会委員の大半が「解散やむなし」とのお考えをお持ちのようですので、仕方ないことかもしれません。同生会という箱物はなくなりませんが、熊本大学理学部生物学教室で学んだ仲間であることは変わりません。これまでの繋がりを皆さん大切に、今まで以上に仲間の輪が広がっていくことを祈念しております。

@@

先生方の同生会解散についての思い②

光陰矢のごとし:22年間大変お世話になりました！

谷 時雄

「こちらが研究室になります。鍵をお渡ししますね。」

2001年の春、自然科学研究科棟5階の全く何も無いがらんとした部屋に案内されてから、いつしか、熊本大学で22年間が過ぎました。その間、皆様方から本当にご支援とご協力を頂き、指導する学生さんが次第に増え、研究機器も増え、お陰様で、楽しく、また自分が思うように研究と教育をさせて頂きました。赴任当初から、還暦を過ぎて理学部長をする頃まで、少しでも研究を前に進めたくて、夕方に一度帰宅して家族と食事をとり、9時頃にまた再び研究室に出てくるといふ二重(?)生活が毎日続きました。私自身は全く何も苦ではありませんでしたが、今思うと、不規則な生活で、3人の思春期子育て真っ最中でもあった家内には、随分と迷惑をかけてしまったと反省しています。一方で、私にとっては、夜の時間は、時には、研究室に夜遅くまで残って実験している学生さん達に声をかけて、たわいない話や、悩み多き若い学生と人生の話を肴に酒盛りを始めたりして、毎日、毎夜が楽しい日々でもありました。お陰様で、研究室での指導を介して、たまには大学に出てこない学生を心配してアパートを訪ねるようなこともありました。最終的に150名を超える多くの個性豊かな学生さん達との得がたい縁を頂きました。

時代の流れで、学生さんの気質も良くも大きく変わり、社会における大学の果たすべき役割も変わらざるを得ない状況になりました。そのような中でも、理学部はいつの時代も、「自然の理(ことわり)を明らかにする学問」であってこそ、理学部が理学部でありえると思います。後は若い先生方にお任せすることになりましたが、皆様方の益々のご健勝と、理学部生物学コースの更なるご発展を心より祈念しております。

@@

先生方の同生会解散についての思い③

定年退職に寄せて

寺本 進

昭和53年に熊本大学理学部生物学科に第30回生として入学以来、およそ45年間に亘って学生、教員として生物教室にお世話になりました。そして、2023年3月31日をもちまして定年退職の予定です。この間、恩師でもあり上司でもあった石倉成行先生が急逝され、熊本地震に襲われたと言った辛い経験もりましたが、若い人達に囲まれ師弟の和熱とまでは行かないまでも楽しく教員生活を送ることが出来ました。そして、同窓生の皆様や先生方に助けて頂き、何とか定年まで辿り着いたと言うところです。ただ、最後の3年間がコロナ禍による遠隔授業となり、学生さんと接する機会が大きく制限されたことは心残りです。4月からは年金生活になりますが、具体的な計画などは未定ですので、面白い話がありましたら教えてください。

これまでに皆様から頂いたご厚情に感謝しつつ、同窓生ならびに生物教室のさらなる発展をお祈りしております。

@@

同生会の由来

「同生会の命名」

～同生会の由来について「生物学科50周年記念誌から抜粋～

一回生 今江 正知

師弟の和熱を基本とする生物学教室の伝統を作られた小山準一先生、同生会の名称も先生の命名である。この名は生物学教室同窓会の略称であるとともに、役に立つことを目指す医学や工学と違い、金儲けにならない生物学を学んで「卒業したけどドウシヨウカイ」というのが正しい意味である。

昭和25年4月、2年生になって正式に生物学科所属が決まった一回生8名が初めて生物教室に集まった。教室受け入れのセレモニーや諸注意などがあり、教室の案内などが済んだところで、小山先生の研究室に全員が呼び込まれた。ソファなどの応接セットに座るよう指示され、全員コチコチになっている前で、先生は人数分の湯飲み(茶托つき)を並べられた。それに一つ一つお湯をつぎ、急須に茶の葉を入れ、湯飲みの湯を急須に移して丁寧に茶をいれてくださった。ガキで半人前に扱われるのが当たり前だった我々が、一人前の人間として、教授のお客様と同じに扱っていただいた感激は今も忘れぬ。

小山先生のように貴族的に格好良くはできないが、教室に帰ってきてからは学生に対して一人前にお茶を出すことを私も続けてきた。こちらが下っ端で年齢差が少なかった頃の学生には恐縮する者が多かったが、小山先生のような白髪頭になるにつれて当然のサービスとして受ける学生が増えてきた。これも50年の時代変化である。

当時は、終戦から5年ほどの時期で、日本中が飢えていた食糧難の時代である。そんな中で、荷物を持って帰る手伝いを命じられ、お供すると夕食をご馳走になることが再々あった。奥様も、扶養家族が多いからと平気な顔をしておられたが、間米を買わないで餓死した裁判官があつてから何年か後の、まだ家族の食料を確保するのに苦労する時代に、随分厚かましい行動だったと反省する。しかし、そのような中で、飽食の現代には考えられないような濃密な師弟関係が育まれたことも事実である。



五高の卒業生で熊本が郷里だった先生は、生物学教室を立派に育て上げることが第一の仕事と常に考えておられた。そして、その最大の成果が臨海実験所の創設である。文部省のやり方は、五高が出来た明治の時代も現代も同じだが、大切な施設だからと国が新しく作ってくれたりはない。五高のときは、熊本県が土地・建物代(10万円で県費8万円で寄付2万円)の総てを用意したが、臨海実験所を作るためにも、まず土地と建物を地元の寄付で整えることが第一である。その立地条件を調べ、地元を説得するために、先生は天草の各地を丹念に回っておられた。我々学生が知っただけでも合津の他に牛深、崎津、御所浦などの名前がある。先生は酒好きだったから、天草中を楽しんで飲んで回ったようにみえ、また、そのように言われたこともある。しかし、実際のご苦労は大変なものだったろう。先生の指示で焼き付けをした候補地の写真や地元の世話役さんとの記念写真などの多さからも、そのご苦労が推測できる。小山先生は話題が豊富な方なので書く人が多いと思うが、同生会報に書かれたことのない二、三をここに記録しておく。

@@

お知らせ

同生会では、会員相互の情報交換や熊大生物系教室との交流を深めるため、インターネットホームページを開設しています。アドレスは<http://www.doshokai.com>です。※当ホームページは同生会の解散に伴い、2024年4月30日をもって閉鎖いたします。

@@

編集後記

コロナ禍の影響もあり、広報係の担当になってから初めての会報が最終号となってしまい、大変申し訳ございません。イベント事も開催がなく、写真等も少ない最終号となっておりますが、代わりに同生会に対する想いがあふれる最終号となっておりますのでご一読いただけますと幸いです。あと1年間は同生会HPの運営を担当させていただきますので今後ともよろしくお願いいたします。



同生会広報係 田崎 裕三(63回生)